

「IJJUN」 Kの性格

	事項	Kの性格
一四四	上二〇 「そう不真面目に若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気のつくのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。」	私がどういふ態度か、あまり関心がない。(自分のことしか関心がない。)
一四六	上七 「するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので」	孤独・人と相容れない・つきあいが悪い。性格が堅い 友達が寄ってこない 興味のない人(自分のレベルよりも低い人とはつきあわない) 友人を寄せ付けない。人に興味が無い 自分の専攻だけに興味がある。
一四七	上七 「Kは不意に仕切りのふすまを開けて私と顔を見合わせました。彼は敷居の上に立ったまま、何を考えていると聞きました。」	突然「何を考えている」という発言。自分には考え事があるが、おまえは何を考えている？ 思いついたら突然行動をする。かなり積極的である。他人の迷惑を顧みない所がある。
一四七	下一 「するとKの方からつかつかと私の座敷へ入ってきて、私のあたつてゐる火鉢の前に座りました。」	気にかかることがあると、とことん突き詰める。お嬢さんのことが頭を占めていることが解る。
一四七	下二五 「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入ったことまで聞くのです。」	普段のKとは違う。P.136上〇「私には第一に彼が介し難い男のようにみえました。」 普段(平生)のKの性格は？
一四八	上七 「彼は元来無口な男でした。」 「平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。」 「彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開かないところに、彼の言葉の重みもこもっていたのでしよう。いったん声が口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。」	内省的 どうして「もぐもぐ」するのか。間違いを指摘されたくないから、言葉を慎重に選んでいる。 一生懸命選んだ言葉なので、いったん口を吐いて出た言葉には、説得力・強い意志が現れる。
一四九	上四 「いくらKでもそこに気のつかないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分のことに一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。」	思い詰めると周りが解らなくなる。 自殺へ？

上 八	「重くて鈍い代わりに、とても容易なことでは動か せないという感じをわたくしに与えたのです。」	
一五二 上 二五	「私は彼の強いことを知っていました。また彼の真 面目なことを知っていました。」	
下 四	「しかもいくら私が歩いても彼を動かすことはとう ていできないのだという声はどこかで聞こえるので す。」	
[39]	「Kの生返事は翌日になっても、その翌日になつて も、彼の態度によく現れていました。彼は自分から 進んで例の問題に触れようとすると、気色を決して見せ ませんでした。」	
「私はKの私より横着なのをよく知っていました。 彼の度胸にも敵わないという自覚があったので す。」	「けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。 学資のことで養家を三年も欺いていた彼ですけれど も、彼の信用は私に対して少しも損なわれていなか ったのです。私はそれがためにかえって彼を信じだ したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明 白な彼の答えを腹の中で否定する気は起こりようが なかったのです。」	
一五三 上 二	[40]	「それが単なる自白にすぎないのか、またはその自 白について、実際の効果をも収める気なのかと問 うたのです。しかるに彼はそこになると、なんにも 答えません。黙って下を向いて歩きだします。」
上 九	「彼の天性は他の思わくをはばかるほど弱く出来上 がってはいなかったのです。こうと信じたら独りで どんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男 なのです。」 「彼はいつにも似ない悄然とした口調で、自分の弱 い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そ うして迷っているから自分で自分が分からなくなっ てしまったので、わたくしに公平な批評を求めるよ りほかにしかたがないと言いました。」	
言葉を選び、慎重なので、「鈍く」なる。 言葉を選んでるので、自分の気持ちか正 確に現れ、真実であるということが伝わる。 よく考えたことなので、簡単には動かさ ない。	意志が強い。 お嬢さんへの恋も真面目なものである。 他人からどう働きかけようが影響を受けな い。	
「生返事」 私に話しかけたのは、相談す るためではなかった。自分の気持ちを表に出 したかっただけである。 私に意見を聞く必要はないから、私と話を するつもりはない。 相談するかしないか決まっていなから答 えられない。(Kの口に出す言葉は、自分の 意志の表れ。口に出さないとすることは、ま だ決まっていない。)	横着……事がどう進もうが、あまり気にし ない。度胸がある。自分のことだけに集中 する。(養家事件)	
彼の言葉を信じている。(本当のことを口 に出す。) 自分の第一信条のためなら、度胸が据わ る。第一信条を裏切ることは決してない。 決まっていなから答えられない。嘘は 言えない。 まだKの心の中でお嬢さんへの恋が整理の つかない状態だから、何も言えない。	自信・自立心がある。 自分の信じる道に自信がある。 他人に意見を求めることがない。 プライドの高さ 悄然……元気がない様子 いつもは何かを述べるときは、堂々と、強 い口調で述べている。 「いったん声口を破って出るとなると、そ の声には普通の人よりも倍の強い力がありま した。」 [36]	

一五四	下一六	<p>「Kは真宗寺に生まれた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです。」</p>	[41]	<p>真宗……浄土真宗。「南無阿弥陀仏」を称念する事によって往生成仏をする。と説く。阿弥陀如来の功德を期する他力本願の信仰。肉食妻帯を認めた。          「生家の宗旨に近いものではなかった」          もっと厳格なものだった。自分自身を痛めつけるもの。          「意志の力を養って、強い人になるのが自分の考えだと云うのです。それにはなるべく窮境な境遇にいないてはならないと結論するのです。」[121]</p>
一五五	上二	<p>「わたくしはただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。」</p>		<p>それまでに全く恋愛感情を抱いたことはなかった。そのほかはともかく、恋愛においては、一切道の妨げとして、眼中にはなかった。          精進……雑念を鳥、一心に修行する。</p>
上三	上八	<p>「Kは昔から精進という言葉が好きでした。」</p>		<p>道のためにはすべてを犠牲にして精進をする。          欲を離れた恋……結婚したい・一緒に暮らしたいという実際の方面へ動き出さないもの。</p>
上二六	上二六	<p>「そのころからお嬢さんを思っていたわたくしはいきおいどうしても彼に反対しなければならなかったのです。わたくしが反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方がよけいに現れていました。」</p>		<p>侮蔑……「くだらないものにつつつを抜かして……。」という哀れみの気持ち。          「精神的に向上心のないものは馬鹿だ。」</p>
一五六	上二五	<p>「ただKは私をたしなめるにはあまりに正直でした。あまりに人格が善良だったのです。」</p>	[42]	<p>自分が策略にかけられているとは思いません。(自分のことだけに集中している・周りのことは気にならない) 世間知らず。</p>
一五七	上八	<p>「彼はいつも話す通りすこぶる強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられないたちだったのです。」</p>		<p>「平気でいられない」          自分の矛盾に対しては許すことができない。          「彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして口で先へ出た通りを、行為で実現しにかかります。」[24]</p>
一五八	上八	<p>「しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走りださなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほどの尊い過去があったからです。」</p>	[43]	<p>尊い過去……今まで第一信条にそって生きてきたこと。</p>
上二四	上二四	<p>「前後を忘れるほどの衝動が起こる機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏みとどまって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す道を今まで通り歩かなければならなくなるのです。」</p>		<p>「前後を忘れるほどの衝動」……Kはいつも冷静なので、「衝動」が起こることはない。          「過去が指し示す道」          今まで第一信条にそって生きてきたこと。          精進の道。</p>

		一五九	一六〇
下二	上七	下二六	上八
「その上彼には現代人の持たない強情と我慢がありました。」	「昨日上野で『その話はもうやめよう。』と言ったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点にかけて鋭い自尊心を持った男なのです。」	「Kの果断に富んだ性格はわたくしによく知れていました。」	「この事件についてのみ優柔な訳もわたくしにはちやんと飲込めていたのです。」
精進の道に対して、強情であり、我慢して生きてきた。	もう矛盾を指摘されたくない。矛盾したのは自分でもう解っているのだから、もう話はしたくない。	思い切った性格 養家事件	今まで色恋沙汰はなかった。自分の信条に反するから、お嬢さんへ向かうことを踏みとどまっている。

平生のKの性格を私があまりにもよく知ってる。ところがKは自分のことではいっばいで、私の変化に気づかない。

協調性のなさ  
自己本位